
僕と奴

みとせなぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と奴

【Nコード】

N8822A

【作者名】

みとせなぎ

【あらすじ】

誰にだって嫌いな人間はいる。嫌いな人間と戦う『僕』のストーリー。

（前書き）

少し暗めなお話。ネガティブ思考型な話です。ご注意ください。

僕は、好き嫌いなく誰にでも接している。が誰にでも、嫌いな人とは、いるもので…、

例外なく僕にも、嫌いな奴はいる。

好きになるのは理由は、ないとよく言う。だが、嫌いになるのは必ず理由があると、僕は、思う。

十月の今、そいつの席は、僕の隣りに位置する。席替えをして、気が滅入ったのを覚えている。だけど僕は、なんとか仲良くやっていこうと、友好的に接したのである。

だが、席替えをして二日もたたないうちに、僕は、奴を完全に嫌いになった。なぜなら、奴が僕にこう言ったからだ。

「隣りの人ウザいんだけど」

笑いながら…

自意識過剰かもしれないが、僕は、みんなから嫌われては、いない。十人十色、つまり、いろんなタイプの友達がいるし、遊びもする。友達は、僕のもとに寄ってくるし、いつも僕は、笑いの中心にいた。もちろん男友達もいるし、女友達もいる。

携帯のアドレス帳は親や、親戚なども入っているが軽く二百件は越えている。

奴と僕は、四月も、席が近かった。名前の順で座ると、僕は奴の左斜め後ろの席だった。

ところで僕は、奴のことが最初から嫌いだったわけではない。そして、奴も僕のことを好きでもない、嫌いでもない、普通というランクで僕を見ていたに違いない。

五月。席替えは、二か月ごとに行われることになっていたので、まだしていなかった。

そして、異常に気付いたのもその頃だった。

奴と、僕の前の席の小林が話していた時、僕は、口をはさんだ。

小林は、僕の言葉に笑って返答してくれた。が、奴は、今までの笑顔が顔から消え、僕に何のコメントもしなかった。だが、次の瞬間には、奴は、また小林と何事もなかったかのように話し始めた。

僕は、途中で割り込んだのが悪かったかな、と反省した。だが、数日後にも同じようなことがあった。この日も奴と、奴の隣の席の小林が喋っていた。そして、いきなり小林が僕に話を振ってきた。

僕は、言葉を返した。奴は、僕を嘲るような眼を向けてきた。僕は、その時、僕が何をしでかしたかわからないが、奴は僕のが嫌いだ。と、悟った。友達は、皆そろって、そんなことないよ、考えすぎだよ。と、そのようなことを言った。

六月、席替えをした。壁側の席だった。奴とは、遠く離れた席だった。何事もなく平和に暮らした。相変わらず、僕には、友達がいた。もうクラス全員の名前は、フルネームで言え、名前と、顔が一致した。ついでに、よく僕のクラスに遊びに来る人の名前も覚え

た。ついに、六月が終わり、七月はあつというまに過ぎ夏休みが来た。夏休みは、それは、充実したものだった。友達とは、よく遊び、海、プール、祭りに花火大会と、様々な場所に行った。部活にも参加した。遊び過ぎで宿題を最後の頃に泣く思いで徹夜してやるはめになったのは言うまでもない。その位、僕は遊んだ。

新学期。

再び席替えをした。それが現在の席だ。

「隣りの人ウザいんだけど」

と、奴に言われた。僕は落ち込んだ。そのことを友人に言った。友人達は、

「酷い奴。」

「気にすんな。」

など、そのようなこ

とを口々に言った。それは僕の心の支えとなった。中には

「俺も嫌いだっただんだ」

と言った人もいた。やがて、この事件は、クラス中に広まった。

学級委員をやっていたし、クラスの笑いの中心にいたため、僕は、クラスの少数グループに属した奴より人望が厚かった。九月初頭の事件は、確実に僕の株をあげ、クラスの全員を味方につけた。

十月。まだ席替えは、していない。今日も、隣りの奴は、休みだ。いつからだったか…奴が来なくなったのは…

奴は、十月の今日も休んだ。もうすぐ十一月になる。僕は、今日もみんなの中心となってみんなと笑いながら生活する。明日も奴はこないだろう。

休んでいる理由は、クラスの皆が、僕の肩を持つということにあるのかもしれない。

なぜ、そう言えるのかって？

なぜなら、奴が自分じゃない違うって言っても、皆、信じやしなかったんだ。

何をつて？

もちろん、

「隣りの人ウザい」

と、言ったのが奴ではなくて、僕だということをさ。

僕が奴に悪口を言われたと言えば誰もが信じた。だけど、奴のことは嘆かわしいことに誰も信じはしなかった。

十一月末になれば、また席替えが行われるだろう。しかし、奴は来ないだろう。いや、来ない。

余談だが、その事件があった頃、それより残酷な言葉を奴に吐いた。僕に盾突いたアイツが悪い。ただそれだけのこと。僕は友好的に接した。それを奴が拒んだ。ただそれだけのこと。

今、アイツがいない生活を僕は満喫している。

end .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8822a/>

僕と奴

2011年1月16日05時15分発行